

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



北海道推進協 20 周年特別号

発行 北海道 NIE 推進協議会

〒 060-8711

札幌市中央区大通西 3 丁目 6

北海道新聞社内

☎ 011-210-5802

FAX 011-210-5826

新聞どう活用 熱く論議



現場の教師らが各自の実践を報告し論議をしたパネルディスカッション

札幌で北海道セミナー 道内5氏がパネル討論

北海道 NIE 推進協議会(高辻清敏会長)主催の第 2 回 NIE 北海道セミナーが 11 月 19 日、札幌市中央区の北海道新聞本社で開かれた。文部科学省初等中等教育局教育課程課の杉本直美教科調査官が基調講演を行い、NIE アドバイザーら道内 5 氏がパネルディスカッションで、子供の力を伸ばす NIE の在り方を論議した。(2 面に基調講演とパネルディスカッションの要旨)

北海道セミナー開催は昨年(平成 27 年)に続き 2 回目。道内の教育、新聞関係者ら 80 人が参加した。

中学国語教師の経験がある杉本氏は「次期学習指導要領と NIE」をテーマに「育成したい資質・能力と新聞の活用」と題し講演。前半で学習指導要領の改訂の方向性など国の動向を説明した。後半で全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)結果などによる子供たちの状況を話し、これを

基調講演で「子供たちに新聞の読み方を教えることも必要」と呼びかける杉本氏



踏まえた授業での新聞活用のポイントを提言した。

パネルディスカッションは、小中高校・大学の教師・教育行政関係者のパネリスト 5 氏が「NIE 実践の導入・定着の課題を探る」と題し、それぞれの実践経験や NIE への期待などを論議した。パネリストは朝倉一民氏

道 NIE 推進協が 20 周年

功労者の 4 氏を表彰

氏が表彰された。

◇おこたわり

道内の新聞社・通信社 13 社でつくる北海道 NIE 推進協議会(高辻清敏会長)が、1996 年 6 月の発足から 20 周年を迎えた。11 月 18 日に開かれた北海道セミナーの中で 20 周年記念セレモニーが行われ、功労者 4 氏

北海道セミナー詳細報と功労者 4 氏の寄稿を掲載するため発行を延期し、8 ページ建ての特別号としてした。

3 面に北海道 NIE 研究大会と北海道・東北 NIE アドバイザー・事務局長会議、6 面に十勝新聞教育研究大会、6・7 面に各地区セミナー、8 面にリレーエッセー「多紙彩々」を掲載しました。

功労者 4 氏を表彰された。功労者 4 氏は北海道 NIE 推進協議会会長の山田家正氏、元北海道 NIE 推進協議会副会長の山田家正氏、元北海道 NIE 推進協議会副会長の山田家正氏、元北海道 NIE 推進協議会副会長の山田家正氏

功労者 4 氏を表彰された。

功労者表彰を受ける山田家正氏



功労者 4 氏を表彰された。功労者 4 氏は北海道 NIE 推進協議会会長の山田家正氏、元北海道 NIE 推進協議会副会長の山田家正氏、元北海道 NIE 推進協議会副会長の山田家正氏、元北海道 NIE 推進協議会副会長の山田家正氏

北海道セミナー パネル討論(要旨)

第2回NIE北海道セミナーで、「NIE実践の導入・定着の課題を探る」と題して行われたパネルディスカッションの主な発言内容を紹介する。

◇

高瀬 小中学校でのNIEの実践状況や課題、意義を聞きたい。

朝倉 子供たちに新聞を日常的に読ませる仕掛けをつくり、授業で積極的に使っている。毎日続けているのは「朝の新聞記事報告」。日直の児童が興味を持った記事を発表し、皆で話し合

▼パネリスト

○朝倉 一民氏(札幌市立屯田北小教諭)
○福沢 秀氏(富良野市立富良野西中教頭)
○志田 淳哉氏(札幌南高教諭)
○内山 隆氏(道教大釧路校准教授)
○箕浦 真人氏(道教育庁学校教育局高校教育課主査)
▼コーディネーター
○高瀬 敏樹氏(札幌旭丘高教諭)
(○印は日本新聞協会認定のNIEアドバイザー)

う。子供の社会を見る目が育っていると感ずる。

北海道セミナー

基調講演(要旨)

文部科学省 初等中等教育局
教育課程課 教科調査官

杉本 直美氏

第2回NIE北海道セミナーで、文部科学省初等中等教育局教科調査官の杉本直美氏が「育成したい資質・能力と新聞の活用」と題して行った基調講演の概要を紹介する。

◇

現在文部科学省で中学校国語の教科調査官をしているが、20年弱、中学校で国語の教師を務めた。新聞を活用した授業を行ったこと

もある。国語を例に新聞活用について、皆さんと考えていきたい。

全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の中学国語で、三つの資料を示し「2020年の日本はどんな社会になっていて、どのように関わっていききたいと思うか」という問題があった。子供たちは「東京五輪が開かれ世界とのつながりが広がるが、少子高齢化で大変な社会になる」など情報に関連付けて未来を予想する解答まで書けるが、自分と社会との関わり方を具体的に書くことがなかなかできない。問題の解説資料には次のようなことが書いてある。

福沢 NIE活動を広げる上で課題がある。すでにやっている先生はオーラを出し過ぎていないか。一方で(取り組んでいない)年配の先生を変えるのは大変だ。職員室にあったマガジンラックを利用し、新聞を子供の手の届く所に置いた。図書室前に記事を掲示したり、昼休みに校内放送で読ませたりもしている。

志田 高校では先生一人一人が個人商店のように頑張っているが、横のつながりをつくるのが難しい。(大学入試改革による)センター試験の廃止、高校基礎学力テストや大学入学希望者学力評価テストの導入、次期学習指導要領と、高校の現場は大きく変わる。評価テ

ストに対応する学力要素をNIEでどう身に付けさせるかが一番の課題だ。
高瀬 大学や教育行政の立場からNIEの現状をどう見るか。

内山 教員志望の学生に行ったアンケートによると、新聞をほとんど読んでいない。学生にとって新聞は身近なメディアではなくなっている。一方、新聞を使った授業によって子供に育つ力を聞いたところ、(情報を正しく読み解く)リテラシー能力や批判的思考力などを挙げた。

箕浦 学習指導要領で子供に求められている理解する力、読み取る力などをどう実現するか。その実践が授業では必要だ。新聞はツ

ールとして非常に有効な資料となる。
高瀬 NIEを定着させるための取り組みは。

志田 同じテーマを扱った新聞5紙のコラムのコピーを生徒や先生に配った。これを基に自分でコラムを書いた子がいて、それに対してさらに生徒が意見を述べ合った。こうした取り組みは教科の枠を超えてできるのではない。

内山 学生に記事を使った授業の実践記録を読ませたり、模擬授業をやらせたりしている。学生は記事収集や使うタイミングの難しさ、子供の発達に応じたNIEカリキュラムの必要性を感じている。

箕浦 先生が力み過ぎない方がいいのではないかな。まずは始める。(記事に)触れてみる、でいい。まずは先生が(新聞や記事に)興味、関心を持たないと駄目だ。
高瀬 NIEへの期待は何か。

朝倉 子供が新聞を読んだ後にアウトプットしていく活動が欠かせない。新聞作りの実践ではICT(情報通信技術)との融合が大切だ。作った新聞を学校のホームページに載せ、保護者の感想を聞くことで双方向性も期待できる。

福沢 自分たちの取り組みを面白そうだと思う先生が増え、子供の変化も見えて取れば、実践者は必ず増える。

させてほしい。目的によつてはインターネットの方がよい場合もある。新聞の内容と形式の特性を子供たちに認識させて、新聞を使わなくてはいけないケース、新聞を使うのが有効なケースを教えてほしい。たとえば「部活動新聞」や「歴史新聞」を作らせる時、一般紙をそばに置き、紙面のどこに何を書くか考えさせる。一覧性はネットにはない。

価値あるものは必ず残るが、価値は子供たちが決める。子供たちが調べたことを新聞形式でまとめた際「大変だったけど、レポートでは得られないものを得た」と思わなければ「作れと言われたから作った」で終

わる。「新聞を活用してよかった」と実感させなければならぬ。
新聞の読み方を教えることも必要だ。トップ記事とコラムの特徴は何か。子供たちの中には紙面がカテゴライズ(政治、社会、スポーツなどジャンル別になつてい)ざれていることも知らず、朝刊と夕刊の違いが分からず、どちらから開くのか分からない子もいる。さらに自宅で取っていない子はどこで読めばいいのか。入手方法を教えることも実生活では必要だ。
私は新聞が好きで価値があると思うし、なくなつてほしくない。しかし新聞を読むのは難しいことなのだ。

ロールプレイや紙芝居も

盤溪小で道NIE研究大会

「北海道NIE研究会」(上村尚生会長)札幌市立星置東小学校長)主催の「第21回北海道NIE研究大会」が10月26日、札幌市立盤溪小学校で開かれ、小中高校の教師ら約30人が二つの公開授業と実践発表を通して新聞活用について理解を深めた。公開授業には記事の筆者として北海道新聞報道センターの玉邑哲也記者がビデオ映像で紹介され、子供たちの興味を引いた。

研究大会が札幌市内で開催されるのは数年ぶり。北海道NIE推進協議会など

との共催が続いており、今回はほぼ10年ぶりの「単独開催」となった。

盤溪小の近井祐介教諭が1年生の道徳「約束やきま



近井教諭の公開授業



関谷教諭の公開授業

りを守り、みんなが使うものを大切に」の授業を公開した。近井教諭は、函館市内の雨傘無料貸し出しサービスで傘の返却が少な

い現状を紹介した北海道新聞の記事(6月6日夕刊)を教材に使用。「1500本用意した貸し傘のうち110

0本が戻って来ない」という状況を、ロールプレイや紙芝居などを使って子どもたちに実感させた。

同小の関谷ひろの教諭の公開授業は4年生の社会科「アイヌの人たちの生活と文化」。札幌市内で行われた伝統儀式「アシリチエブノミ」を紹介した9月13日朝刊の掲載記事を活用し、自然と共生するアイヌ民族の思いについて理解を深めた。ビデオ映像の中で玉邑記者は「(アシリチエブノミなどの)アイヌの人たちの話は昔話ではありません。仲良く暮らしていける社会を君たちがつくってください」と呼びかけた。

このほか安平町立早来小の富樫忠浩教諭が学年を超えて社会に関心を持つってもらう「第6回道北小中学生新聞スクラップコンクール」(北海道NIE研究会道北支部主催)の入賞者が決まり、10月22日、北海道新聞旭川支社で表彰式が行われた。最優秀賞には「小学4(6年)の部」の押切君(旭川・東光小5年)ら5人が選ばれた。

押切君らが最優秀 道北小中学生新聞 スクラップコンクール

新聞記事の切り抜きを通じて社会に関心を持つてもらう「第6回道北小中学生新聞スクラップコンクール」

旭川や士別、美瑛、留萌などから小1から中3までの310名の応募があり、19点が入賞。押切君は「卓上四季」を読んでコメントを付け、文中の人物の似顔絵を調べて描いた。このほかテーマごとに解説や提言をつけたりと、作品は多岐にわたった。

表彰式で、菊池安吉審査委員長(旭川市立神居東中学校長)は「新聞の良さはたくさん情報が詰まっていること。ぜひ読み続けて社会を見る目を鍛えてほしい」とあいさつした。

押切君以外の入賞者は次の通り。(敬称略)

学力向上の効果検証を

福島で道・東北アドバイザー会議

新聞協会の「北海道・東北ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議」が、9月24日、福島市の福島民報社内で開かれた。アドバイザーら25人が参加。北海道NIE推進協議会からは朝倉一民アドバイザー(札幌市立屯田北小教諭)、志田淳哉アドバイザー(札幌南高教諭)、渡辺多美江事務局長(道新NIE推進センター)、小田島玲事務局次長(同)の4人が参加し、活動の実情について情報交換した。

会議では、新聞協会の関口修司NIEアドバイザーが「NIEの教育効果を考える」と題して基調提言を行った。関口氏は自らの実践を踏まえて「NIEによる学力向上」「週1回のNIEタイムの効果」を報告。「NIEの効果検証を進めたい。本年度の全国学力テストの生のデータを、アドバイザーの協力を得て可能な範囲で集めていきたい」と呼びかけた。関口氏は各地のアドバイザー会議で同様の提言を行って

り、全国的なデータ収集を目指している。

各地の活動報告では、NIE実践教師の自主組織についての取り組みが相次いだ。秋田県では自主組織がなかったが、9月にNIE勉強会を初開催した。岩手県では本年度、小中の部、高校の部で合わせて7回の

NIE学習会を開催する。一方で山形県では数年前に実践指定校の教諭の組織化を試みたが、開催地の問題などで頓挫した経緯が報告された。

このほか、アドバイザーや実践教師の活動に対して、金銭的支援の工夫も報告された。宮城県NIE委



東北地方のアドバイザーと話し合う志田アドバイザー



グループ討議の報告をする朝倉アドバイザー

員会は授業への新聞無料提供の経費を予算化し、本年度は2000部を提供した。さらに実践校に毎年各3万円の活動費を確保している。山形県では県教委から協議会への負担金が復活し、全国大会への旅費の全額負担が実現した。

朝倉、志田の両アドバイザーは、グループ討議の中で北海道の活動を説明した。朝倉アドバイザーは「新聞はいわば毎日発行される教科書。思考や判断の訓練に使える」と教材としての魅力を話し、志田アドバイザーは「今後はアドバイザー同士ネットワーク作りが重要」と課題を述べた。

功労者からの言葉

元北海道N I E推進協議会コーディネーター

日下部 憲一さん



学校現場では、児童生徒に「生きる力」を培うために、様々な教育活動が行われております。北海道N I E推進協議会が創立された時期は、読解力の低下が新たな教育課題として指摘され、その改善に向け各学校には一層の努力、効果ある取組が求められておりました。

新聞の特性を理解し活用を

歯止めをかけるためにスタートしたのがN I Eの始まりです。そして、新聞を学習教材としての教育効果を高めることを目的に立ち上げた、「新聞関係者と教育関係者の組織」が北海道N I E推進協議会です。

さらに、2004年(平成16年)12月のOECD国際調査の結果を受け、翌年、文部科学省は、「読解力向上プログラム」及び「読解力向上のための指導資料」を公表しました。その中で学校に求められる取組の一つとして、「新聞や科学雑誌などを含め、幅広い読み物に触れる機会の実現」として

具体的にはN I E活動などをあげており、私自身N I Eへの期待や高まりを実感しておりました。

現行の学習指導要領の柱は「言語活動の充実」です。その充実を図るため各教科や他の領域で「新聞活用N I E研究会等の民間教育研究団体の実践発表やN I E地区セミナー等で検証されてきました。

今、グローバル化や情報化等の変化が加速化するなかで、21世紀型学力育成等の重要性が叫ばれております。特に、次年度発表される学習指導要領の目玉となる

新聞は、取材から紙面構成まで幾多の試練、厳しい点検を経て完成した信頼できる情報源であり、実社会や実生活に関連した情報の宝庫でもあります。創意工夫を生かした新聞活用を

くさかべ・けんいち 1949年生まれ。札幌市内の中学の教諭・教頭・校長を勤める傍らN I Eの実践に取り組み。この間5年間、北海道N I E研究会会長を務めた。教職退職後に2010年から5年間、北海道N I E推進協議会事務局でN I Eコーディネーター。

元北海道N I E推進協議会会長

山田 家正さん



北海道N I E推進協議会が発足してから今年が20周年になります。今までも歴代関係各位の地道なご努力により国内N I E活動の拠点の一つとして高い評価を受けてきたと理解しております。そして、最近の新聞紙上におけるN I E関連記事

これからが本領発揮の時

からも、高辻会長さんはじめ道内の各新聞社、先生方、事務局の積極的な活動により更にレベルアップしていることは確かなことであり、現在N I E活動に参加しておられる皆様に敬意と感謝の意を表す次第です。

過日、この20周年記念セレモニーの席上で4名が功労者表彰を受けましたが私もその一人に選ばれ大変光栄に存じております。ご高配を賜り誠に有難うございました。

そのセレモニーの席上でも申し上げたことですが、20周年とは申せ、人間で言えばやつと成人式を迎えたところで、これからが本領を発揮して成果をあげなければならぬ時期になります。そのためにも、新聞社にはますます良質な新聞記事を提供して頂き、それらをもとに現場の先生方が種々な角度から子ども達の視野を広げる、あるいは物事を深く掘り下げる力を養って下さるような教育をして頂

き、そして事務局の皆様方にはこれらの活動に更なるお力添えをお願いする次第です。

最近、N I E活動が大学等にも広がりを見せているようで何よりのことと喜んでおります。しかし、情報機器の多様化、普遍化が進んだこともあってか、新聞を読むことが大学生が増えていることが気になります。その学生たちが将来学校の先生になる場合もあるからです。大学でも是非新聞を読

まないと困るような教育上の工夫をして欲しいものと思っています。

終わりに、北海道が今後も日本のN I E教育に大きな役割を果たす活動を続けられることを願って20周年記念の祝辞と致します。

◇ やまだ・いえまさ 1935年生まれ。小樽商科大学教授、学長を務めた後、2004年5月から6年間、北海道N I E推進協議会会長。北海道開拓記念館長も務めた。専門は藻類学。

北海道 NIE 推進協議会 20 周年

元北海道十勝新聞教育研究会会長

舟越 洋二さん



私は、現職時代、校長室の壁面一杯に幾重にも新聞記事を貼っていました。新聞は、難しい内容を端的にわかりやすく書いてあるし、見出しで大まかな内容が掴める。そして、何度でも読み返すことができる私の頼りになる相棒です。

思い返せば、1994年

カリキュラムに新聞教育を

(平成6年)に今の「NIE実践指定校」制度の前身である「パイロット計画」の実践者になったのがNIEとの幸せな出会いでした。小学3年生の担任だった私は、子どもたちに個人や班のスクラップ、新聞づくりにも挑戦させました。2000年(平成12年)からの町教委勤務時には、町の教育改革に取り組みましたが、町独自の新たな教科のカリキュラムの中に「はがき新聞」や「かべ新聞」の活用を盛り込むよう進めま

した。校長の時には、2010年(平成22年)からNIE実践指定校を受け、正面玄関のスペースに図書の本と新聞が読めるコーナーを設置するなど学校ぐるみで取り組みました。

さて、2008年(平成20年)3月に改訂された現行の学習指導要領には、念願だった新聞教育が盛り込まれましたが、同時に授業時数が増えたことなどもあつて、十勝・帯広で当たり前のように制作され、全国的にも高い評価を得ていた「か

べ新聞作り」などに、取り組む学校が少なくなってきたいます。

私は、このことを解決するためには、学校のカリキュラムの中に新聞教育を位置づけ、先生方が授業の中で無理なく取り組める環境を作る事がもっとも有効であると思います。

創立20周年を迎えた北海道NIE推進協議会には、素晴らしい実践をされている先生がたくさん育っています。先生方には是非、頑張っていたきたいし、でき

ればもっとまわりに広げて欲しい、仲間をもっと増やして欲しい、そして、NIEを学校ぐるみ町ぐるみ管内ぐるみの取り組みに広げていくと切に願っています。

◇

ふなこし・ようじ 1952年生まれ。十勝管内の小学校教諭・教頭・校長を勤めながらNIEの実践に取り組む。2008年度から5年間、北海道十勝新聞教育研究会会長。鹿追町教委指導室長、鹿追町ジョパーク推進室長も歴任。現在、十勝毎日新聞社NIE・教育相談室コーディネーター。

元北海道十勝新聞教育研究会会長

若山 茂樹さん



私が新聞を媒体とした教育に関わってきたのは十勝新聞教育研究会で、たまたま北海道では最初に新聞教育に着手した地域でした。もちろんそれまでも北海道全域の学校で新聞づくりに取り組まれ優れた作品がたくさん輩出されていたのですが、十勝を含めたそれ

紙面の温かさこそ教育力

らの活動の全道的な組織化がNIE推進協議会の手で進められて20年という節目を迎えたことに、深い感慨を覚えます。

私は、北海道の教育、中でも学力を根底から支えているのは、新聞を媒体とした教育、NIE推進協議会の活動とその実践者であると思っています。

アクティブ・ラーニングが大変に注目されている近年の教育界ですが、それは授業を受ける子ども達が主体的に学びに参加し、仲間と深く考えながら課題を解決するために、その手法として

の教育の生き生きとした進展に大きくその役割を果たすことでしよう。

新聞の持つ教育力は、NIEが注目されてきた現在、他のメディアと比較した有用性がしばしばいわれていますが、私は新聞と活字、そして写真などによる紙面の温かさが一番であると思っています。行間から伝わる人と人のかかわりの思いや新聞編集者の願いなどが、日本人にとつてかけがえのない心の結びつきを強めてくれます。

NIEを通して、よりいっそう学力によって結びつく

人と人の輪を大切にしたい社会を創りたいと思いますし、また、新聞界全体とも密接で温かい情報の提供や供給を深め合っていたいものだと思っています。

◇

わかやま・しげき 1944年生まれ。道内NIE運動の草分けともいえる十勝管内で中学校教諭・教頭・校長としてNIEの実践に取り組み。2001年5月から4年余り北海道十勝新聞教育研究会会長。バスケットボール指導者としても活躍。現在十勝毎日新聞社NIE・教育相談室コーディネーター。

新聞からカタカナ探そう 十勝新聞教育研 小1の授業公開



「北海道十勝新聞教育研究大会」が11月16日、帯広市立稲田小で開かれ、教員ら約60人が意見交換した。十勝管内の小中学校教員でつくる北海道十勝新聞教育研究会(会長・中村宏喜鹿追町立鹿追中学校)の主催。公開授業は石川直人教諭による1年生国語の「カタカナをみつこう」Ⅱ写真Ⅱ。まず「ソ」と「ン」、「ツ」と「シ」など、書き間違えやすいカタカナの違いを確認。区別のポイントとして、ひらがなの字形に重なる視点を示した。

児童28人は配布された新聞のスポーツ面を開き、石川教諭の指導で、1ページの中にあるカタカナ言葉を「北海道十勝新聞教育研究大会」が11月16日、帯広市立稲田小で開かれ、教員ら約60人が意見交換した。十勝管内の小中学校教員でつくる北海道十勝新聞教育研究会(会長・中村宏喜鹿追町立鹿追中学校)の主催。公開授業は石川直人教諭による1年生国語の「カタカナをみつこう」Ⅱ写真Ⅱ。まず「ソ」と「ン」、「ツ」と「シ」など、書き間違えやすいカタカナの違いを確認。区別のポイントとして、ひらがなの字形に重なる視点を示した。

児童28人は配布された新聞のスポーツ面を開き、石川教諭の指導で、1ページの中にあるカタカナ言葉を「北海道十勝新聞教育研究大会」が11月16日、帯広市立稲田小で開かれ、教員ら約60人が意見交換した。十勝管内の小中学校教員でつくる北海道十勝新聞教育研究会(会長・中村宏喜鹿追町立鹿追中学校)の主催。公開授業は石川直人教諭による1年生国語の「カタカナをみつこう」Ⅱ写真Ⅱ。まず「ソ」と「ン」、「ツ」と「シ」など、書き間違えやすいカタカナの違いを確認。区別のポイントとして、ひらがなの字形に重なる視点を示した。

児童28人は配布された新聞のスポーツ面を開き、石川教諭の指導で、1ページの中にあるカタカナ言葉を「北海道十勝新聞教育研究大会」が11月16日、帯広市立稲田小で開かれ、教員ら約60人が意見交換した。十勝管内の小中学校教員でつくる北海道十勝新聞教育研究会(会長・中村宏喜鹿追町立鹿追中学校)の主催。公開授業は石川直人教諭による1年生国語の「カタカナをみつこう」Ⅱ写真Ⅱ。まず「ソ」と「ン」、「ツ」と「シ」など、書き間違えやすいカタカナの違いを確認。区別のポイントとして、ひらがなの字形に重なる視点を示した。

記事で国会の役割学ぶ 附属旭川中で公開授業

第16回上川地区・旭川セミナーが10月21日、旭川市の道教大附属旭川中で開かれ、法律の制定や国会の役割を学ぶ公開授業Ⅱ写真Ⅱなどが行われた。

第16回上川地区・旭川セミナーが10月21日、旭川市の道教大附属旭川中で開かれ、法律の制定や国会の役割を学ぶ公開授業Ⅱ写真Ⅱなどが行われた。教員や大学生ら約40人が参加した。公開授業は3年生の社会科学で、同校の庭瀬奈穂美教諭が生徒に「天皇の生前退位」に関する二つの記事を読ませて「この後どうなるのだろう」と問いかけた。そして生前退位を実現するには皇室典範の改正や、特別法制定など法的な手続きが



必要なことを理解させた。別の記事から国会や政府がどんな動きをしていくのかを読み取らせた。庭瀬教諭は「新聞記事は本文も大事だが、表や図を活用して理解するように」と生徒に助言した。実践報告では、旭川大の社会科学教員養成課程での取り組みを、齋藤真宏旭川大准教授と菊地達夫北翔大教授と(旭川大非常勤講師)が紹介した。発表には旭川大の学生2人も加わり、NIEについて感想などを話した。旭川東高の大村勲夫教諭は国語の授業での、新聞の報道写真を題材にした取り組みを紹介した。この中で写真が読み手に強



い印象を与える例を示し、「みるこ」の重要性を理解させる狙いを説明した。生命の大切さ分かったよ！第3回上川地区・富良野セミナーが9月29日、富良野市立扇山小で開かれた。

教員ら約30人が参加した。畠山展大(のぶひろ)教諭が2年生の道徳の授業を公開したⅡ写真Ⅱ。札幌市が10月から施行した動物愛護管理条例の内容を報じた記事を紹介し「犬やネコを10匹以上飼う時は届け出が必要」などの内容をクイズ形式で教えた後、生き物を大切にすることはどんなことをか考えさせた。実践発表では、奉仕団体の「富良野ロータリーアクトクラブ」が2008年度から富良野の小学3、6年生を対象に実施している壁新聞コンクールを報告。同クラブの相川貴行さんが「自分で書いて表現することが大事。新しく聞いたことを誰かに伝えることが新聞」と壁新聞をつくる意義を語った。



富良野高の水野雅文教諭(生物)は「遺伝子情報と先端医療」「脳科学と人工知能」など過去から現在までの新聞を時系列に並べ、生徒に未来を予測させ、問題点を考えさせてリポートを書かせた授業を報告。「今後『移植医療と再生医療』などのテーマで実践例を増やしていきたい」と話した。



僕らが作った壁新聞です 追分高生が公开发表会

第11回日胆地区・安平セミナーが10月18日、安平町の追分高校で行われ、同校の全校生徒が参加した壁新聞作りを生徒自らが発表したⅡ写真Ⅱ。

同校生徒は7月中旬から班に分かれ、同校や安平町の歴史、十数年前から同校が取り組む赤いヒマワリ植栽やボランティア活動などを取材し、壁新聞を製作した。

公开发表会には同町の豊島滋教育長や保護者も出席。生徒たちは班ごとに各紙面の出来栄えのほか「記事の配置をどうするか、みんなで悩んだ」「意見交換の中で友人の新しい面を知ることができた」「地域の人と取材を通して話すことができたなど製作の苦労、成果を報告した。

実践発表では、むかわ町立仁和の小の大宮貴子教諭が壁新聞づくりを発表した。同校は全校児童が7人の小規模校。校内に新聞を掲示し、児童が気になった記事に投票したり、日直の児童が新聞記事を紹介して、新聞への関心を高めた上で壁新聞製作に取り組んだ。

日高町立厚賀中の田倉有紀教諭は、自分の考えなどをまとめる「主張文」を書かせて、その主張文を記事に書き換えて壁新聞を作った授業を報告した。



り上げられた東京都にある小さな印刷所のお年寄りが開発した方眼ノートを題材にした。「スゴイのに売れない」という見出しなど

を読ませて意見を書かせたことなどを報告した。

ワークシートを 記事から作った

第5回石狩地区・石狩セミナー兼石狩市教職員研修が8月2日、石狩市総合保健福祉センターりんくろで開かれた。石狩市内の小中学校の教員26人が新聞記事を使った授業の方法を学んだ。

石狩市教委との共催事業。NIEアドバイザーで札幌市立屯田北小の朝倉一民(かずひと)教諭が授業などの新聞活用例を紹介した。同校では高学年の日直の児童が、その日気になった記事を紹介する活動を長年続けている。「子供たちの視野が広がり、社会と接するきっかけになる。文章を要約することで読解力もつく」と効果を話した。

その後、参加者は2人1組になり、新聞記事を基に

函中部高生ら発表、討論 記事を使い国際政治学

第15回渡島地区・函館セミナーが11月10日、函館中部高で開かれ、新聞記事を活用して国際政治を学ぶ授業が公開された。

小中高の教員ら約40人が参加した。

公開されたのは「国際平和と日本の役割」をテーマにした二瓶賢一教諭による2年生の政治経済の授業。

まず「核兵器禁止条約」制定に向けた国連総会の決議を取り上げた2紙の社説を生徒に読ませて主張の違いを確認した。

続いて生徒のグループが北方領土問題について発表しⅡ写真Ⅱ、グループ討論



を行った。さらに北方領土と日米安保についての記事を生徒に読ませ、戦後の国際関係での日本の立場などへの理解を深めた。

授業の後、参加者からは「生徒が自分から意見を言

い合うのは素晴らしい」となどの声が上がっていた。

小中高校の教員6人によるトークセッションも行われ、それぞれの実践例を報告した。函館市立亀田中の川端裕介教諭は、見出しとリード文を比較させ、情報を読み取る力を付ける取り組みを紹介した。

函館白百合学園中高校の三背慈子教諭は、新聞のコラムを活用すると時事問題に詳しくなり、推薦入試の対策になると話し、同校の青木沢子教諭は職員室前に新聞記事を張り出し、生徒がニュースを身近に感じられるようにする取り組みを報告した。

函館市立北美原小の田上悟教諭は「教科書は東京の事例のため親しみにくい

が、地域の話題が載っていることができた」「地域の」と取材を通して話すことができたなど製作の苦労、成果を報告した。

実践発表では、むかわ町立仁和の小の大宮貴子教諭が壁新聞づくりを発表した。同校は全校児童が7人の小規模校。校内に新聞を掲示し、児童が気になった記事に投票したり、日直の児童が新聞記事を紹介して、新聞への関心を高めた上で壁新聞製作に取り組んだ。

日高町立厚賀中の田倉有紀教諭は、自分の考えなどをまとめる「主張文」を書かせて、その主張文を記事に書き換えて壁新聞を作った授業を報告した。

2年生の道徳で 物作りの心知る

第12回胆振地区・伊達セミナーが11月24日、伊達市立伊達小で開かれ、矢島勲教諭が2年生の道徳の授業を公開したⅡ写真Ⅱ。

教員ら約30人が参加した。公开发表は、新聞に取

味を持ちやすい」と報告。

函館水産高の我妻雅夫教諭は、新聞記事を参考に函館空襲で沈んだ船について生徒が調べ、新聞作りをした取り組みを説明。七飯町立大沼中の岩本宜之教諭は、北斗市立上磯中教諭時代、生徒と道南いさりび鉄道や道南生まれの米「ふっくらんこ」を取材し、新聞を作ったことを報告した。

新聞記事だと、子どもが興味を持ちやすい」と報告。

印刷所社長直筆のメッセージが紹介されると、製品に懸ける熱い思いを知り、人の心の美しさに触れた。

実践報告では、室蘭市立東明中の棟方伸吾教諭が、全校生徒が取り組む壁新聞作りについて話した。学級代表の生徒に取材の心構えや記事の書き方や見出しの付け方を指導する講習会を開いたり、壁新聞作りの手引書を毎年更新してノウハウを引き継いでいる一などの取り組みを説明した。

北海道登別明日中等教育学校の半藤幸広教諭は、難民問題の記事を使った3年生(中学3年相当)社会科の授業について発表。元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんのインタビュー記事



設問を作り、授業で使えるワークシートを作成する体験も行ったⅡ写真Ⅱ。



今回の米大統領選では、大手メディアの報道の在り方も大きな問題に

米国からの教訓生かそう

日本経済新聞札幌支社編集部長 馬場 完治

完治

「某月某日付、本紙朝刊に掲載した記事の中で、『地下鉄さっぽろ駅』とすべきところを『JR札幌駅』と書き誤ってしまい、紙面の信頼を著しく傷つけました。今後、こうした誤りを繰り返さぬよう十分に注意いたします……」

連発で、自分も若い頃は何かと書いいた。◆
事実関係を間違えると当事者にも読者にも大変な迷惑をかける。繰り返すと紙面の信頼性が損なわれてしまう。しかし、海の内こうで起きている「信頼低下」はその次元をはるかに超えて深刻だ。

「まさかのまさか」が起きたアメリカ大統領選挙。トランプ氏勝利を予測できなかった（予測したくなかつた？）大手メディアが、世論の動向を見誤ったなどと批判を受けている。一握りの政治・経済エリートの代弁者に成り下がり、実は豊かさを実感できずに不平と不満を抱えていた白人労働者（主に共和党支持者）たちの悲鳴に耳を傾けてこなかったことが背景にあるといわれている。

サウスダコタ州出身で今は東京に住む60代女性に聞いてみたら、「昔から新聞といえば地元ネタ中心のコミュ



ニティーパーが大半。全国紙のUSAトゥデー、まして政治面なんかはあまり読まれないんじゃないかしら」との答えだった。

米国中西部寄りに位置するサウスダコタは、伝統的に共和党支持者が多く今回もトランプ氏が勝った。米事情に詳しい先輩記者も「もともと新聞に書かれていたことなんか信じていない、だから読まないという人が多いのだから」と分析していた。

これを裏付けるデータもある。米ギャラップの世論調査では「ニュースメディアは完全、正確、公平に報じていると思うか」という問いに対し、「信頼できる」と答えた人の割合は32%で1年前の40%から8ポイント低下。1972年の調査開始以来で最低レベルだった。

日本はどうか。今年8月に発表された総務省情報通信政策研究所の調査結果によると、「メディアの信頼度」の設問で「新聞の信頼度」が最も高く、68%だった。幸い、まだ「おまえはクビだ！」とダメだしを食らってはいない。だが、米国メディアが置かれた現状から学ぶべき教訓は多い。

インターネットだけでなくSNS（交流サイト）経由のものも含めて世の中には情報があふれている。何が起きているのか、そのニュースが事実かどうかはもちろん大事だが、読者にとって、その中から、どんなニ

ースが選ばれ、どのようなニュースで伝えられたのかも同じくらい重要なのではないか。
恣意的にニュースを選んでいる、都合の悪いことは報じない、とみれば、瞬く間に読者は離れていくだろう。NIEは複数の新聞を読み比べ、友人や先生と意見を戦わせることができる貴重な場だ。毎日まいにち「信頼のモノサシ」を当てられている新聞の責任は極めて重いと改めて実感させられる。

志津木さんと谷口さん奨励賞
いっしょに読もう！
新聞コンクール

日本新聞協会は、第7回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の受賞者、受賞校を発表した。道内からは、奨励賞に札幌市立太平中2年の谷口結羽（ゆう）さんと、立命館慶祥中3年の志津木順さんの2人が選ばれたほか、優秀学校賞に蘭越町立昆布小、学校奨励賞に新篠津村立新篠津中がそれぞれ輝いた。

また、北海道NIE推進協議会による北海道地区優秀賞に3人、北海道地区奨励賞に5人が選ばれた。コンクールは小中高生と高専生を対象。昨年9月からほぼ1年間の新聞から興味を持った記事を切り抜いて家族や友人と一緒に読み、感想や意見をまとめ

た。道内859点（前年比345点減）を含め、全国で過去最多の4万5366点（同5485点増）の応募があった。

その中から最優秀賞3点、「HAPPY NEW S賞」1点、優秀賞30点、奨励賞120点を選定。団体応募385校から優秀学校賞15校、学校奨励賞114校が選ばれた。

なお、第8回コンクールは11月25日に募集を開始し、締め切りは来年9月8日。

編集後記

今号は20周年特別号として普段の倍の8ページになりました。功労者4氏の寄稿をはじめ、11月の北海道セミナーの詳報、リレーエッセー「多紙彩々」など今後のNIEの進む方向を示唆する盛りだくさんの内容です。この冬にじっくり読んでいただければと思います。（小）